

テーマセッション 「クラウドの見える化を考える」講評

小野 成志
学校法人根津育英会、CAUA 監事

CAUA 第9回合同研究分科会では、テーマセッションを「クラウドの見える化を考える」と題して、安東孝二氏と伊藤忠テクノソリューションズ株式会社石橋立也氏にご講演をいただきました。

安東氏は、昨年の研究分科会では、クラウドという概念に対する曖昧さについての懸念を表明されておりましたが、今回はその後のクラウドの最新動向を踏まえ、今後のクラウドの可能性についてご講演をいただきました。

安東氏によれば、クラウドは決して万能でも革新的な技術でもないし、またそれ自身では何か新しいものを生み出す基盤にはならないといえます。しかし、それでもイノベーションの契機にはなるかもしれない、という興味深い指摘をされました。そして、クラウドブームが終息に向かいつつある今こそ、幻想を捨てて本来あるべき現実的なクラウドの使い方を考える機会であるとの主張は傾聴に値します。

特に安東氏が大学のイノベーションを語る中で提示された RGT（運用、成長、変革）フレームワークには強い印象を受けました。今日の大学の情報システム部門は、ただ運用だけに明け暮れ、成長にも変革にも手が届かないという現状があります。これに対し、クラウドの「現実的な」利用は、大学の差別化とイノベーションに寄与するとの指摘は、今後の大学の IT 投資を考えなければならない人々に有力な指針となるでしょう。

続く石橋氏の講演では、アカデミックな領域でのまさに「現実的な」クラウドの導入事例を紹介していただきました。

静岡大学の事例では、コストは 80%もの節約が実現できたとの報告は、それだけでも十分驚きを与えるものでした。また2例目の教育委員会の導入事例においても、将来にわたる大幅なコスト削減の実現を図れること、費用の「見える化」という点で大きなメリットがあることが紹介されました。

会場からは、コスト削減だけがクラウドの目的なのかなどの厳しい質問も飛び出しましたが、実は、石橋氏の紹介した事例はそれに留まらず、安東氏の言うところの変革への手がかりが示されていました。ただ残念ながら時間の都合で、この点について石橋氏からの十分なお説明をいただくことができませんでした。これは司会者である私の不手際であり、この場を借りてお詫びを申し上げるとともに、ご紹介いただいた A-Cloud の可能性について私の感じたところを補足させていただきます。

石橋氏からご紹介いただいたクラウドサービス事例では、障害対応、将来設計に対するスケラビリティなどの柔軟さについて紹介されており、アカデミックな領域でこうしたサービスを取り入れることができれば、運用に関わる時間が大幅に削減できることになりそうです。そうなれば、大学は「変革」に向けての余裕を作ることができます。

私はこの講演を通じて、クラウドには、今後イノベーションに対する大きな可能性があることに気づかされました。